工業高校の生徒の職業意識に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿濱, 茂樹, 東, 良典 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6273

工業高校の生徒の職業意識に関する研究

阿濱茂樹・東　良典

Student's Awareness of the Career in Industrial High School

Shigeki AHAMA and Yosinori AZUMA

【概要】
専門高校での職業指導・進路指導に関して，体系的な指導と教育心理学的なアプローチによる教育実践学的研究が求められている。そこで，本研究では，工業高校の生徒の職業に対する意識と進路選択に対する自己効力，自己肯定意識を調査し，それらの関連について検討を試みた。その結果，就きたい職業の有無と進路選択に対する自己効力，就きたい職業の有無と自己実現的態度に関連が見られることが明らかになった。

【キーワード】　工業高校，職業意識，進路選択に対する自己効力尺度，自己肯定意識尺度

1．はじめに

職業に直結した知識や技術を身につける段階の生徒を対象とする工業高校における職業指導は生徒の職業意識やキャリアに関する考え方など様々な要素が絡み合い，高度な指導技術が求められると考えられる。しかし，工業高校をはじめとした専門教育における職業指導は，指導者の経験に頼る傾向があり，教育学的なアプローチによる研究は数少ない。その中で，浦上（1993）は，進路選択に対する自己効力の尺度作成を試み，職業価値観，同一性について調査を行い，得られた結果を元にそれらの関連について帰納的に検討している。また，大谷，久保田（2005）は，生徒の適応の指標として無気力感を検討することを取り上げ，効力感，統制感との関係について検討を行った。その結果，進路選択自己効力感を高めることを目指した進路指導の有効性を明らかにしている。

本研究ではそれらの研究成果を踏まえ，工業高校における生徒の職業に対するイメージと，自己効力や自己肯定意識を調査し，それらの関係について検討を試みた。

2．研究方法

2-1 目的

本研究では工業高校の生徒を対象として，就きたい職業の有無，程度，職業に関する興味・関心について実態を把握することを目的に調査を行った。さらに，進路選択に関する意識形成の仕組みを探るために（浦上 1995）の「進路選択に対する自己効力尺度」，（平石 1990）の「自己肯定意識尺度」を用いて調査した。「自己肯定意識尺度」については下位要素である「自己実現的態度」，「自己閉鎖性・人間不信」，「自己表明・対人的積極性」，「被評価意識・対人緊張」を調査した。そして，それらが就きたい職業の有無等とどのような関係にあるのかを考えた。また，学科ごとに比較し，学科ごとの特色について分析を行った。

2-2 対象者

富山県内の工業高校の 2 年生 196 人。デザイン科 20 名（男子 1 名，女子 19 名），工芸科 20

平成 17 年 9 月 30 日受理

名（男子3名，女子17名），機械科40名（男子40名），電子機械科38名（男子38名），電気科40名（男子37名，女子3名），建築科38名（男子18名，女子20名）

2-3 調査時期

2004年11月

2-4 調査用紙の内容

調査用紙は第一部「高校生の職業意識」，第二部「進路選択に対する自己効力」，第三部「自己肯定意識」の三部で構成した。

＜第一部＞

第一部では高校生の職業意識を明らかにするため，就きたい職業はあるか，働く意欲はあるか，夢中になっているものや興味のあることは何かということを質問した。また，就きたい職業をイメージできている生徒の特徴をつかむために，興味をもっていることについて質問を設定した。

0.　学科名，性別

1.　将来つきたい職業はあるか（「ある」「なんとなくある」「ない」の3択）

2. ①就きたい職業の名前及び理由

②就きたい職業に向いているか（5件法）

就きたい職業にどの程度就きたいのか（3件法）

（2.は1.で「ある」「なんとなくある」と答えた人のみ）

3.　①就きたい職業を見つけようとしているか（2件法）

②見つけようとしていない理由　（3.は1.で「ない」と答えた人のみ）

4. 今夢中になっているもの興味のあるもの（自由記述）

5. 中学や高校の進路指導に関して思うこと（自由記述）

＜第二部＞

進路選択に対する自己効力尺度（浦上1995）30項目

測定概念

「自己効力」は，ある行動が自分にうまくできるかという予期の認知されたものであり，行動と直接的な関連をもつとされている。進路選択に対する自己効力の強い者は，進路選択行動を活発に行い，努力をする。一方，自己効力の弱い者は，進路選択行動を避けたり，不十分な活動に終始してしまうと考えられている。自己効力はどれくらい努力するか，困難に直面した際にどれくらい耐えられるかを決定する。また，強い自己効力をもつ人は自分の能力をうまく活かし，さらに努力するとされる。

＜第三部＞

自己肯定意識尺度（平石1990）29項目

測定概念

自己肯定意識尺度は，対自己領域と対他者領域に大きく二分され，それぞれが3つの下位成分から成立している。対自己領域の下位成分は「自己受容」，「自己実現的態度」，「充実感」，対他者領域の下位成分は「自己閉鎖性・人間不信」，「自己表明・対人的積極性」，「被評価意識・対人緊張」である。

本研究では対自己領域の「自己実現的態度」，対他者領域の「自己閉鎖性・人間不信」，「自己表明・対人的積極性」，「被評価意識・対人緊張」を使用した。

3.　結果と考察

3-1 全体の職業意識

3-1-1 就きたい職業はあるか

全体の「就きたい職業はあるか」の質問に対する回答結果を表3-1-1に示す。

表　3-1-1　就きたい職業の有無

ある	42.7%
なんとなくある	32.3%
ない	25.0%

「就きたい職業がある」と「就きたい職業がなんとなくある」で75%という結果となった。この結果は，工業高校ということで，専門教科を通して職業に関する指導が行われており，生

徒にも職業観が身についているということを表していると考えられる。また，高校に入学する時点で，具体的な職業に関するイメージがあったということも考えられる。

3-1-2 就きたい職業は自分に向いているか

全体の「就きたい職業は自分に向いているか」の質問に対する回答結果を表 3-1-2 に示す。

表 3-1-2 就きたい職業は自分に向いているか

向いている	13.0%
少し向いている	39.1%
どちらともいえない	37.9%
少し向いていない	6.5%
向いていない	3.6%

「向いている」と「少し向いている」で半数を超えた。半数は「向いている」と答えているが，半数は「向いている」と考えていない。これは，実際にその職業について働いたことがなく，自分では判断できないからではないかと推察される。高校生ということで，さまざまなことに興味が湧き，本当に自分に合っているものなのか不安になっているものと思われる。

3-1-3 就きたい職業にどの程度就きたいか

全体の「就きたい職業にどの程度就きたいか」の質問に対する回答結果を表 3-1-3 に示す。

表 3-1-3 就きたい職業にどの程度就きたいか

必ず就きたい	23.7%
就きたい	46.2%
できれば就きたい	30.1%

「必ず就きたい」が約 24%であるということは，就きたい職業はあるが，「必ずその職業でないといけない」と考えているわけではないといえる。「必ず就きたい」というのが少ないのは，職業の多様化が原因と考えられる。職業が多様化した現在，様々な職種や働き方がある。就きたい職業に就けなくても，それに近い別の職業でもいいという考え方になってきていると考えられる。加えて，調査時において就職難ということも「必ず就きたい」が少ない原因だと考えられる。求人が減っているということは，新聞やニュースで流れている。したがって，「就きたい職業に就けないかもしれない」，「就きたい職業に就けても適応できるかわからない」などといった不安を感じているのではないかと考えられる。したがって，自信を持って「必ず就きたい」とはいえないのではないかと考えられる。

3-1-4 就きたい職業をみつける意識

「就きたい職業を見つけようとしているか」の回答結果を表 3-1-4 に示す。

表 3-1-4 就きたい職業をみつける意識

見つけようとしている	79.2%
見つけようとしていない	20.8%

「就きたい職業を見つけようとしていない」と答えた生徒が 10 人いる。この，就きたい職業を見つけようとしていない生徒の，見つけようとしていない理由は「面倒くさい」や「わからない」といったものである。進路選択の時期において，就きたい職業を見つけようともしていない生徒が少なからず存在することは，フリーターやニートの増加という現状を示していると考えられる。

3-1-5 自己肯定意識

全体の自己肯定意識をまとめて表 3-1-5 に示す。

表 3-1-5 自己肯定意識

		平均値
		全体
対自己領域	自己実現的態度	22.63
	自己閉鎖性・人間不信	18.61
対他者領域	自己表明・対人的積極性	21.13
	被評価意識・対人緊張	20.28

自己肯定意識のうち，自己実現的態度の平均値は，先行研究における高校生（普通科）の平

表 3-2-1　「就きたい職業はあるか」の回答結果（学科別）

	デザイン	工芸	機械	電子機械	電気	建築
ある	80.0%	42.1%	31.6%	34.2%	35.9%	50.0%
なんとなくある	20.0%	26.3%	36.8%	34.2%	33.3%	34.2%
ない	0.0%	31.6%	31.6%	31.6%	30.8%	15.8%

表 3-2-2　就きたい職業の具体例（学科別）

デザイン科	人数
漫画家	5
イラストレーター	4
グラフィックデザイナー	3
アニメーター	2
ゲームクリエーター	2
その他	12

工芸科	人数
木工関係	1
大工	1
インテリア系雑貨・家具店の店員	1
サンプル職人	1
その他	13

機械科	人数
整備士	7
製造業	6
自動車関係	2
モータースポーツ関係	1
工業関係	1
専門技術関係	1
その他	11

電子機械科	人数
製造業	5
自動車整備士	3
プログラマー	2
技術専門職	1
設計・製作関係	1
プログラム・回路関係	1
IT関連	1
航空整備士	1
ウェブデザイナー	1
工業関係	1
ゲームデザイナー	1
その他	9

電気科	人数
電気工事士	10
電気関係	8
教師	2
電気店	1
製造業	1
コンピューター関係	1
自動車整備士	1
その他	12

建築科	人数
建築士	6
建築関係	4
看護師	2
インテリアコーディネーター	2
大工	1
匠	1
設計士	1
設計事務所	1
模型を製作する仕事	1
インテリアデザイナー	1
その他	28

均値よりも高い値となっている。これは，就きたい職業があり，それに向かって前向きに生きていこうとしているため，自己実現的態度の値が高くなったと考えられる。

逆に，自己閉鎖性・人間不信の平均値は高校生（普通科）の平均値よりも低い値となっている。これは，信頼できる友達，仲間がいるからだと考えられる。また，自己表明・対人積極性および被評価意識・対人緊張の値は高校生（普通科）の平均値よりも低い値となっている。このことは，普通科の高校生よりも他人に対して自己を表現したり，評価されるという場面で他人に対する緊張が少ないことを示していると考えられる。これは，各学科の専門教科で，ものづくりなどの実習を通して，自己の表現スキルが身につき，評価されるのに慣れてきているのではないかと思われる。

3-2 学科別に見る職業意識

3-2-1 就きたい職業はあるか（学科別）

「就きたい職業はあるか」の回答結果を学科別に表 3-2-1 に，具体例をまとめたものを表 3-2-2 に示す。

デザイン科や建築科の「就きたい職業がある」の値が高いのは，デザイン科や建築科は他の学科よりも専門的であるからだと考えられる。デザインや建築はセンスが問われるものであり，「行きたい高校がないから」，「学力が足りないから」という理由で，デザイン科や建築科を選ぶということは少ないと考えられる。したがって，入学の時点でデザインや建築に惹かれて入る人が多かったと思われる。入学の時点である程度就きたい職業が決まっていたものと推察さ

表 3-2-3 就きたい職業は自分に向いているか（学科別）

	デザイン	工芸	機械	電子機械	電気	建築
向いている	3.8%	6.3%	15.4%	21.7%	18.2%	11.1%
少し向いている	46.2%	43.8%	53.8%	47.8%	30.3%	26.7%
どちらともいえない	42.3%	50.0%	23.1%	26.1%	36.4%	46.7%
少し向いていない	3.8%	0.0%	7.7%	4.3%	12.1%	6.7%
向いていない	3.8%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%	8.9%

表 3-2-4 就きたい職業にどの程度就きたいか（学科別）

	デザイン	工芸	機械	電子機械	電気	建築
必ず就きたい	23.1%	50.0%	28.0%	15.0%	23.3%	18.6%
就きたい	50.0%	41.7%	36.0%	55.0%	46.7%	46.5%
できれば就きたい	26.9%	8.3%	36.0%	30.0%	30.0%	34.9%

表 3-2-5 進路選択に対する自己効力（学科別）

	デザイン	工芸	機械	電子機械	電気	建築
自己効力	95.21	91.76	93.38	92.08	95.17	92.72

表 3-2-6 自己肯定意識（学科別）

自己肯定意識尺度		平均値					
		デザイン	工芸	機械	電子機械	電気	建築
対自己領域	自己実現的態度	26.25	20.78	22.51	22.84	22.08	22.08
対他者領域	自己閉鎖性・人間不信	18.45	19.61	19.74	17.40	17.34	19.69
	自己表明・対人的積極性	21.90	21.82	21.14	20.78	21.41	20.43
	被評価意識・対人緊張	18.95	21.26	19.66	20.25	20.51	20.87

れる。

また，具体的に就きたい職業を学科ごとに見ると，工芸科を除く 5 つの学科で，学科に関係する職業が多くみられた。これは，職業との関連が強い工業高校の特徴であると考えられる。各科とも特定の職業に就くための知識や技術を習得することを目的に入学している生徒が多く，さらに専門教科で，職業に関する勉強に力を入れていたのだと考えられる。

3-2-2 就きたい職業は自分に向いているか

「就きたい職業は自分に向いているか」の回答結果を表 3-2-3 に示す。

「向いている」と答えた人の割合が一番高かったのは電子機械科で，「少し向いている」とあわせると約 70%であった。「どちらともいえない」がデザイン科，工芸科，建築科で高くなっている。これらの学科はセンスが問われる学習内容が多く，「向いている」か「向いていない」という自己評価をしにくいものと思われる。

3-2-3 就きたい職業にどの程度就きたいのか

「就きたい職業にどの程度就きたいか」の回答結果を学科別に表 3-2-4 に示す。

「必ず就きたい」と答えた割合が一番高かったのは工芸科である。しかし，工芸科を除く 5

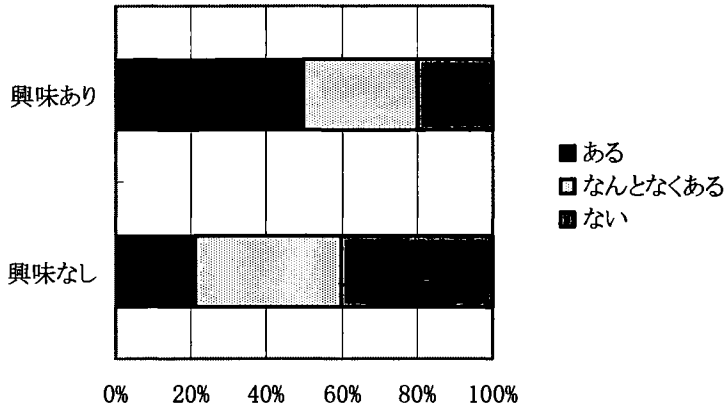

図3-3-1　就きたい職業はあるか（興味の有無）

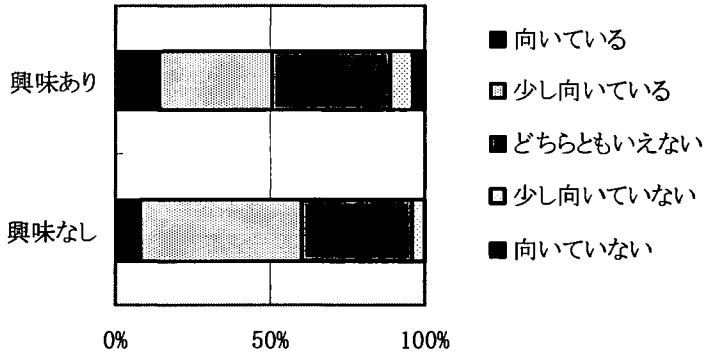

図3-3-2 就きたい職業は自分に向いているか（興味の有無）

つの学科であまり差が見られない。どの学科も「必ず就きたい」がそれほど高くない。これは，各学科で就きたい職業は異なっているが，どの分野の職業も先が見えず，不安に感じていると考えられる。

3-2-4 進路選択に対する自己効力

進路選択に対する自己効力を学科別に表3-2-5に示す。

各学科とも高い値が得られた。特に，デザイン科の値が高くなっているのは，デザイン科の生徒は「就きたい職業がある」と答えた生徒の割合が高く，進路選択に対して前向きに考えているからだと指摘できる。

3-2-5 自己肯定意識

自己肯定意識を学科別にまとめたものを表3-2-6に示す。

自己実現的態度の平均値はデザイン科の値が高くなっている。これは，デザイン科の生徒は「就きたい職業がある」と答えた生徒の割合が高く，就きたい職業があり，目標がはっきりしているため自己実現的態度の値が高くなったと考えられる。

自己表明・対人的積極性の平均値はデザイン科と工芸科の値がやや高い。これはデザイン科や工芸科は専門教科の授業で，自分のアイデアを活かして好きなものを作る機会が多いためだと考えられる。好きなものを作ることができるため，自分を表現することに対して自信がある

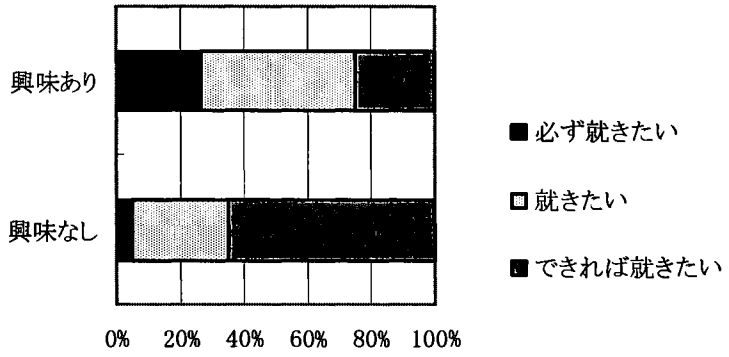

図 3-3-3　就きたい職業にどの程度就きたいか（興味の有無）

表 3-3-4　自己肯定意識（興味の有無）

興味の有無		平均値 興味あり	平均値 興味なし
対自己領域	自己実現的態度 ***	23.52	19.85
対他者領域	自己閉鎖性・人間不信	18.49	19.00
	自己表明・対人的積極性	21.33	20.50
	被評価意識・対人緊張	20.48	19.67

＊＊＊：$p<0.001$

のではないかと思われる。

被評価意識・対人緊張の平均値はデザイン科の値が低くなっている。これは，授業で作品を作り評価されるのに慣れているというのもあるが，デザイン科は特にコンクールなども多く，評価されることが他の学科よりも多いからではないかと考えられる。また，自己表現のところでも指摘したように，自分を表現することに自信があるので，評価されることについて抵抗感が少ないと考えられる。

3-3 興味の有無に見る職業意識

3-3-1 就きたい職業はあるか

「就きたい職業はあるか」の回答結果を「今夢中になっているもの，興味があること」を持っているか持っていないかに分けてグラフにしたものを図 3-3-1 に示す。

「興味あり」の方が「就きたい職業がある」と答えた割合が高い。これは，「興味あり」の方がその興味と関連付けて，就きたい職業を選択しているためだと考えられる。趣味があることや，何かに興味があることは進路選択に影響をあたえていると推察される。

3-3-2 就きたい職業は自分に向いているか

「就きたい職業は自分に向いているか」の回答結果を「今夢中になっているもの，興味があること」を持っているか持っていないかに分けてグラフにしたものを図 3-3-2 に示す。

興味の有無で差は見られず，興味があることを職業に選んだとしても，「向いている」と考えているわけではないと思われる。これは，実際に働いたことがないため，興味があることを仕事とした場合のことをイメージできていないものと推察される。

3-3-3 就きたい職業にどの程度就きたいか

「就きたい職業にどの程度就きたいか」の回答結果を「今夢中になっているもの，興味があること」を持っているか持っていないかに分けてグラフにしたものを図 3-3-3 に示す。

「興味あり」の方が「必ず就きたい」と答えた割合が高い。これは，「興味あり」の方が興味

と関連付けて就きたい職業を選んでおり，自分の好きなことを仕事として，生きて行きたいと考えているものと思われる。

3-3-4 進路選択に対する自己効力

進路選択に対する自己効力は「興味あり」が94.34で，「興味なし」が90.58であった。「興味あり」と「興味なし」の進路選択に対する自己効力の平均の差についてt検定をもちいて検討した結果，有意傾向が見られた。

興味があることにより，それと関連付けて就きたい職業を選択できるので，進路選択に対して積極的に取り組めると考えられる。

3-3-5 自己肯定意識

自己肯定意識を「今夢中になっているもの，興味があること」を持っているか持っていないかに分けてまとめたものを表3-3-4に示す。

自己実現的態度の平均は「興味あり」が23.52で，「興味なし」が19.85であった。「興味あり」と「興味なし」の自己実現的態度の平均の差についてt検定をもちいて検討した結果，0.1%水準で有意な差が見られた。「興味がある」ということは自分のやりたいことがあるということにつながり，その姿勢が自己実現的態度を高めていると考えられる。

自己閉鎖性・人間不信の平均は「興味あり」が18.49で，「興味なし」が19.00であった。「興味あり」と「興味なし」の自己閉鎖性・人間不信の平均の差についてt検定をもちいて検討した結果，有意な差は見られなかった。

自己表明・対人的積極性の平均は「興味あり」が21.33で，「興味なし」が20.50であった。「興味あり」と「興味なし」の自己表明・対人的積極性の平均の差についてt検定をもちいて検討した結果，有意な差は見られなかった。

被評価意識・対人緊張の平均は「興味あり」が20.48で，「興味なし」が19.67であった。「興味あり」と「興味なし」の被評価意識・対人緊張の平均の差についてt検定をもちいて検討した結果，有意な差は見られなかった。

4．まとめ

本研究は，工業高校における職業指導・進路指導を効果的に行うために，生徒の職業に対する意識と進路選択に対する自己効力，自己肯定意識について実態調査を行い，それらの関連について検討を行った。その結果，就きたい職業の有無と進路選択に対する自己効力，就きたい職業の有無と自己実現的態度に関連が見られることが明らかになった。今後の職業指導・進路指導として自己実現的態度や自己効力の面からアプローチしていくことが求められると考えられる。

参考文献

浦上昌則：進路選択に関する自己効力と職業価値観，同一性との関連，日本青年心理学会大会発表論文集，No.1，pp47-48（1993）

浦上昌則：進路選択に対する自己効力と進路計画性・積極性との関連：進路決定に対する自己効力測定尺度の作成の試み3，日本教育心理学会総会発表論文集，No.35，p519（1993）

大谷哲朗・久保田昌子：高校生の進路選択自己効力感と無気力感の関係，日本教育心理学会総会発表論文集，No.42，p431（2000）

大家まゆみ：女子高校生の進路選択：大学進学場面における縦断的研究，日本教育心理学会総会発表論文集，No.40，p45（1998）

田中奈緒子：大学生の進学決定理由と職業に関する意識：性差を中心に，日本教育心理学会総会発表論文集，No.42，p432（2000）

三後美紀・金井篤子：高校生の進路選択過程における自己決定経験とキャリアモデルの役割，経営行動科学学会年次大会：発表論文，No.6，pp135-139（2003）

文部省：高等学校学習指導要領解説　工業編（平成12年3月）